

城下町・結城の基礎を築いた初代武将

結城市に「結城朝光会」という団体がある。会の名称である結城朝光(1167-1254)とは、約420年にわたって結城の地を治めた名族、結城氏の初代武将である。平成15年(2003)2月、この結城朝光会(以下朝光会)が主催して「初代結城朝光750年祭」を開催した。

現在、朝光会会長を務める奥澤武治結城商工会議所会頭は、当時、同750年祭の実行委員長だった。記念誌『初代結城朝光750年祭』の中で奥澤委員長は「このままでは結城の街はダメになってしまう」、「中世の結城には、どこよりも素晴らしい歴史がある」と語っている。

平成15年は、城下町・結城の基礎を築いた結城朝光(以下朝光)の没後750年にあたる。朝光会はこの節目に、朝光の菩提寺で浄土真宗の名刹、稱名寺などを会場にして「大法要」などの記念事業を行うことを決め、全国の結城姓の人々に案内状を送付した。

朝光に対する法要は、「これまでも50年に1度、法要が営まれてきた」(稱名寺)。結城

には朝光に対する熱い思いが脈々と流れており、同750年祭もこの延長線上に展開された歴史イベントと言えるだろう。

そこれまで地元で溶け込んでいる朝光とは、一体どんな人物であったのだろうか。

結城市の隣は小山市。中世、この小山を本拠地に活躍した一族が小山氏である。『結城市史』によると、朝光は仁安2年(1167)、小山氏始祖、小山政光の三男として誕生。治承4年(1180)、後に鎌倉幕府を開く源頼朝は、流罪の地・伊豆で平家打倒を掲げて挙兵した。朝光はこの時から歴史の表舞台に登場してくる。

政光の妻は14歳の朝光と共に頼朝の陣に参陣、加えて朝光(当時は小山七郎宗朝)を頼朝のそばで奉公させてほしいと頼み、頼朝もこれを受け入れた。

こうして朝光は、頼朝側近の武将として戦のたびに手柄を立て、寿永2年(1183)、名字の地となる下総国(現在の千葉県北部と茨城県西部地域)結城郡を与えられた。

結城朝光

Yuki Tomomitsu

また、文治5年(1189)、頼朝が奥州平泉の藤原氏を滅ぼした「奥州合戦」で軍功を立て、恩賞として陸奥国白河荘(福島県中通り南部地域)を獲得。これが白河結城氏誕生の基礎となった。

頼朝亡きあとは、執権北条氏に仕え、頼朝以来の「関東遺老」として幕府内でも重きをなした。朝光は87歳でこの世を去ったが、結城氏は鎌倉・室町、さらに戦国、安土・桃山と各時代を生き抜き、18代秀康の時、越前国の福井に国替となった。この間、約420年、結城氏は関東の名族として歴史にその名を残してきた。

『結城市史』は、鎌倉幕府の公式記録とされる『吾妻鏡』に、初代朝光、二代朝広、三代広綱が登場した回数を書いている。朝光183回、朝広68回、広綱17回。朝光が飛び抜けて多く、鎌倉幕府の様々な局面で重要な役割を果たした様子が窺える。

同じように、結城市民の心にも、朝光が中央政府で華々しく活躍していた姿が刻まれている

のであろう。まさに朝光が市民の誇りとなっている証左をみる思いである。(文中一部敬称略)

主な参考文献

『結城市史 第四巻 古代中世通史編』(昭和55年、結城市発行)、『初代結城朝光750年祭 歴史に学ぶ21世紀・夢のある町づくり』(平成15年、結城朝光会発行)



厨子に安置されている「結城朝光像」(木像)
=結城市結城、稱名寺(筆者撮影)

偉人から読み解く「歴史の力」

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一